

“アシと蹄を考える会”第11弾！ パートⅡ —平成27年度第2回リム&フットケア・ワークショップ—

平成28年2月4日、日本軽種馬協会静内種馬場研修所にて開催された標記ワークショップ。今回は、その後半部分の概要を紹介します。

症例報告

3.「早期のアプローチが功を奏した重度後肢球節内反症例」 (NOSAI日高 家畜診療センター：S氏)

始めに肢軸異常手術頭数、関節数のグラフを示し、平成27年は過去最高の数であり、また関節の3部位の手術数についてのグラフでは、多い順に腕節、球節で、飛節はわずかであった。このあと重度の右後肢球節内反症例を説明した。初診時、7日齢の牝馬で管骨は湾曲し、蹄の外蹄尖～側は低くなっていたことから、外側張り出し蹄鉄のダーリックエクステンションプレートを接着した。22日齢時に球節外側へのシングルスクリュー手術を行い、張出しプレートを中止してスーパーファーストを外側に充填した。術後は23日、30日、55日と経過観察し、120日で改善したためスクリューを抜去した。

まとめでは、重症例でも早期の治療で良くなった。術後の装蹄や経過観察のための来院について説明した。演者から参集者に対し、現場で遭遇したらどうするのか。日齢による装蹄方法を変えるのか、使用する充填剤などの違いはと問いかけられた。

【コメント】

症例は飛節の内反、中足骨はかなり湾曲し、球節内反は重度で、これまでに遭遇したことがないような、重篤な症例であったが、矯正から120日でほぼ正常にまで快復した貴重な症例であった。少し特殊な例として、牧場から装蹄療法も含めて家畜診療センターに依頼したことと、獣医師と牧場スタッフの連携が功を奏した症例で、装蹄師が絡んでいないのが残念であった。また、演者から参集者への質問もあり活発な意見交換が出来た。

4.「育成馬の跛行の主要な原因？ ～シンカンについて～」 (BTC軽種馬育成調教センター：A氏)

シンカンとはどういうものなのか、発生す

る部位はどこか、どんな症状なのかについての説明から始まった。シンカンは実際に触診やレントゲン検査で骨瘤は分からず、管骨近位掌側の痛みで跛行している症例をいい、育成馬では骨瘤を形成する症例は多くない。原因は、①繫靭帯近位付着部炎と②掌側部皮質のストレス骨折がある。次に繫靭帯近位付着部炎とは、繫靭帯の役割とは、発生原因は剥離骨折、近位繫靭帯炎について説明した。また掌側部皮質のストレス骨折、不完全骨折、疲労性傷害、ヒトの脛骨疲労骨折について写真や図を使って詳細な説明がなされた。続いて育成馬におけるシンカンは、BTC周辺では2015年に51頭発生、うち41頭は付着部炎で、残り10頭はストレス骨折であった。シンカンの診断は、症状が表面化しづらく、診断麻酔により原因を特定、予後については、早期に発見し十分な休養により良好で、リハビリが失敗すると跛行を繰り返す難治性疾患となる。

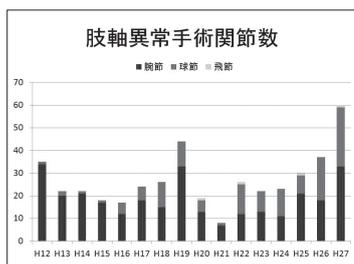
まとめでは、シンカンは跛行を主訴とする管骨近位掌側面に起こる疾患の総称である。その原因は付着部炎とストレス骨折の2つに大別され、損傷の程度により休養期間は様々であることから、しっかりと休養することで難治化を防止する。また触診で原因が特定できなかった育成馬の跛行の約4割でシンカンが原因であったことから、診断麻酔が推奨されると解説した。

【コメント】

質疑応答では、シンカンは日本独自の病名であり、シンカンという病名に対する指摘、JRA育成馬での発生率は、他の育成場での発生率はなど、長時間に及ぶ質疑応答がなされた。本発表は装蹄師にとってもいい刺激になり、今後、分からない跛行の時はシンカンを疑う必要性を考えなければいけないと痛感したところである。

総評

今回の報告は4題で質疑応答を含めて1題あたり30分と十分な時間割であったにもかかわらず、8時を過ぎるまでの時間を要した。自発的に経験や考え方をぶつけての論議や報告者からの質問、あるいは座長からの参集者への問いかけもあったことから、活発な意見交換ができ、これまでで一番の盛り上がりを見せたワークショップであり、また一つ前進したという感じがした。今後もさらにレベルアップに向けて装蹄師と獣医師等の連携を強化していきたい。



S 獣医師の説明スライドの1枚



A 獣医師の説明スライドの1枚